本と写真と彫刻と　　2023.7　福田昌湜

「このくそ暑い7月に、何で酷暑の山梨で二人展を・・・」といった無言のボヤキが電話から伝わって来たわけではないのですが、わたしは怯まず上野さんを説得して今回の展示にこぎ着けました。
と言って、上野さんが手抜きをすることは絶対にないとわたしは確信していたからです。
なぜなら作家のあるべき姿勢というものを、30数年前に他ならぬ上野さんから学んだからです。

阿佐ヶ谷で喫茶＆ギャラリーを運営していた頃のことです。
月に2回の展覧会を開催していて、その時までには相当数の作家の方と交流がありました。
展示をお願いした上野さんは何回も会場の下見に現れ、念入りにプランを練って、展示構成を決めていきました。
もちろん、同様の熱意で展覧会に臨んだ作家の方々もいらしたのですが、（何というか）それが当然ともいった上野さんの自然な態度がとても印象に残りました。
表現者が発表する場所によって姿勢を変えるのはよくあることですが、喫茶店といった制限が多く、格下に見られるような会場であっても、上野さんの全力で取り組む姿勢には頭が下がりました。
その上野さんだから、酷暑の山梨でも、わたしは安心して二人展の準備を進めてきました。

このように書くと、どこか真面目一筋の芸術家のような人物像に見えるかもしれませんが、本人は江戸時代の職人のような粋（いき）な方です。
そもそも芸術という言葉が嫌いで、前近代的思考を好む人です。
そして、時には人を食ったような発想の作品を作ったりして、観客を煙に巻くのがお得意です。
その辺りは随想集『個展物語』に詳しく記されていますので、お買い求めいただけたら幸いです。
なお、本書にはわたしが以前記した上野茂都作品試論もまるまる転載されています。
今思うと、あんな長い文章をよく書いたものだと自分でも感心します。
文章って体力だなと、つくづく思います。

さて今回の二人展ですが、わたしは前座（オープニングアクター）で、上野さんが主役（メインアクター）です。
これは謙遜でも何でもなく、実力的に見れば当然そうなります。
しかしですよ、昨年のサッカー天皇杯を思い出して下さい。
J2の下位に沈んでいたヴァンフォーレが、J1の鹿島と広島を連破して日本一に輝いたじゃありませんか。
稀にこういうこともあるのです。
しかもアウェーではなく、ホーム（ギャラリーの二階がわたしの自宅）での展示です。
互角のプレーを心がけて、今わたしも全力で制作中です。
あの時の真摯な上野さんを思い出しながら。